

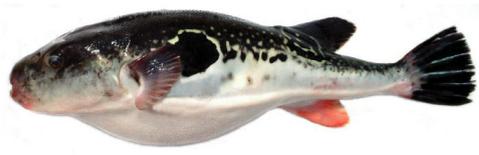
平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 **トラフグ**

学名 *Takifugu rubripes*

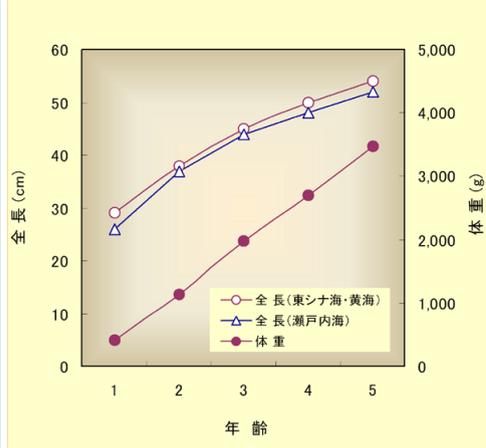
系群名 日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所
西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳
 成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
 産卵期・産卵場: 春期(3~6月)、能登島、若狭湾、福岡湾、有明海、八代海、関門海峡周辺、布刈瀬戸、備讃瀬戸
 索餌期・索餌場: 周年、日本海、東シナ海、瀬戸内海、黄海
 食性: 仔魚後期までは動物プランクトン、稚魚は底生性の小型甲殻類、未成魚以降はエビ・カニ類、魚類等
 捕食者: 不明

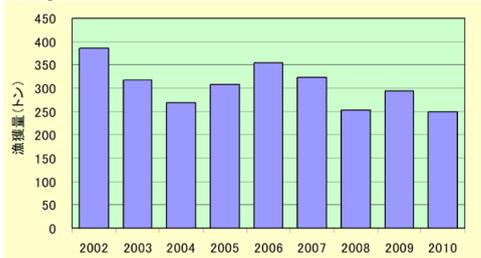


漁業の特徴

産卵場周辺では、3~6月に2歳以上が定置網、釣り、敷網によって漁獲され、成育場周辺では、7~1月に0歳が定置網、小型底曳網、釣り、延縄によって漁獲され、沖合や水道域では、12~3月に0歳以上が延縄によって漁獲される。

漁獲の動向

長期の漁獲量データは存在しない。下関唐戸魚市場(株)における取扱量を長期の漁獲量指標とすると、1971~1993年は610~1,727トンで推移したが1994年から急激に減少し、1997年以降は106~313トンで推移しており、極めて低水準にある。本系群の漁獲量は2002年の385トンから変動しながら減少傾向にあり、2010年は250トンであった。

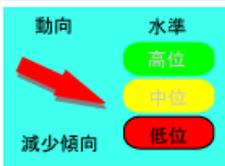


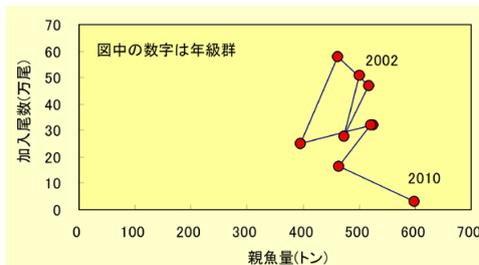
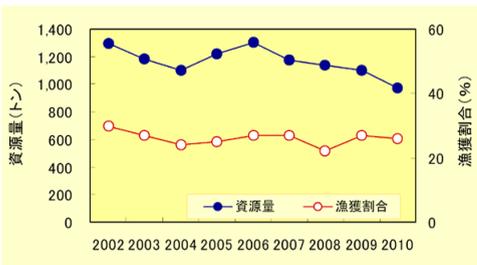
資源評価法

2002~2010年の資源量は、日本海、東シナ海、瀬戸内海(太平洋南を含む)の年齢別漁獲尾数を合算し、自然死亡係数を0.25としてコホート解析(Popeの近似式)により推定した。

資源状態

資源量は2002年の1,296トンから変動しながら減少傾向を示しており、2010年は973トンと推定された。漁獲物の大半は0~1歳であり、FとYPRの関係から成長乱獲であることが示唆された。2006年以降、RPSが減少傾向にあることが資源動向減少の大きな要因と考えられる。人工種苗の混入率は平均0.27、添加効率は平均0.14と推定された。Fと放流尾数を変化させた将来予測から、種苗放流を継続しなければ資源量は更に減少すると考えられた。

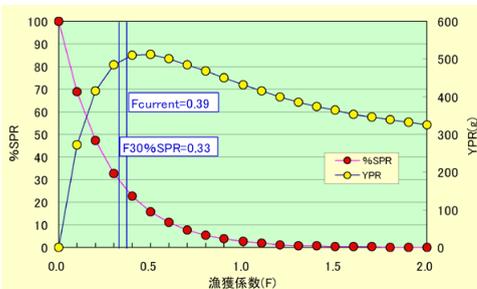




管理方策

全ての年齢で漁獲量を緊急に削減し、資源の維持に努める必要がある。近年、RPSが低い水準で推移し、種苗放流を継続しなければ資源量が更に減少すると考えられることから、放流場所を成育場へ限定し、添加効率の向上をはかる必要がある。加えて、0歳の保護も資源回復に重要と考えられる。また、本系群は複数の産卵場および成育場を有し、それらを由来とする個体群が日本海、東シナ海で混合し、産卵回帰していると考えられることから、各産卵場および成育場における資源管理が系群全体にとって重要である。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	131トン	0.5Fcurrent	0.20	16%
ABCTarget	107トン	0.8・0.5Fcurrent	0.16	13%



資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少
- 漁獲物の大半は0～1歳であり、FとYPRの関係から成長乱獲であることが示唆された
- 2006年以降はRPSが減少傾向にあることから、今後、SSBが減少し、資源回復が困難な悪循環に陥ることが懸念される
- 種苗放流を継続しなければ資源量は更に減少すると考えられた

管理方策のまとめ

- 漁獲量を緊急に削減し、資源回復に努める必要がある
- 放流場所を成育場へ限定し、添加効率の向上をはかる必要がある
- 0歳の保護も資源回復に重要と考えられる
- 本系群は複数の産卵場および成育場を有することから、各産卵場および成育場における資源管理が系群全体にとって重要である

執筆者: 片町太輔・石田 実

資源評価は毎年更新されます。